

全国痴呆症高齢者グループホーム研究交流フォーラム'98



あいさつ

2月28日～3月1日の2日間に渡った「全国痴呆症高齢者グループホーム研究交流フォーラム'98」は全国から750名以上の参加者が集い、燃えるような熱気の中で行われました。終わってみて、あの熱気は何だったんだろうと考えました。それは参加くださった方々が全国各地から運んで来てくださったのだと思います。痴呆症高齢者が住み慣れた地域で、家庭的な雰囲気の中で、普通の生活を送ることのできる在宅所・グループホームに対する社会の期待は大きく、そしてこれらに応えようとする住民・福祉施設関係者の熱意、よりよい地域福祉充実を願う行政関係者などの思いが一つとなって、宮城で燃え上がったのだと思います。

参加者の「熱い心」がそれぞれの地域で開花すること、次回のフォーラムの時「在宅所・グループホーム創っちゃった、施設が変わりました」という声をたくさんお聞きできることを願っています。

皆さま、ご参加ほんとうにありがとうございました。

「全国痴呆症高齢者グループホーム研究交流フォーラム'98」実行委員長

柴茂 三郎

■分散会も燃えた! 3月1日(日)

フォーラムも二日目。

前日の大規模会場でのメッセージを受けて、分散会「グループホームの実践課題と方向」はFACE TO FACEで話しあえる場として用意された。予定400名を大きく越えたため20の分散会でも足りず、一か所50名を越えるところもあり申し訳ない状況ではあったが、それはそれ、参加者の意欲とコミュニケーション力で充実したものとなったのはいうまでもない。分散会後の報告ディスカッションでは報告者に各々3分で分散会のまとめに挑んでいただいた。しかし、さまざまな参加者の幅広い関心と深いテーマにあふれた内容はどのようにもまとめられるものではない。

そこで分散会の記録者に約200字であらましをまとめていただいたものをベースに、報告者の熱いメッセージも盛り込み、簡略に報告をさせていただこう。詳細は後日発行される報告集を参照いただきたい。

●第1分散会

話し合われた主な内容としては、グループホームの運営資金についてケアのポイント、スタッフの教育方法、ボランティアとの関わり、これから特養を作る予定である「よわあい」の思いであった。

「資金面の心配には、あまり無理をしないでするところからやるのがいい、いたらんことをしないとは具体的にどんな事か。職員の力量はミーティングを重視することが大切」等々。

参加者ひとりひとりが熱い思いを語り、まだまだ話したい事がたくさんあり、名残惜しさの中、下村療法(1)に魅了された2時間であった。

★報告者・下村恵美子さん(在宅所よわあい)より一言

民間デイケアは運営が大変です!本やTシャツなどいろいろ頑張って売っています。買ってください!

●第2分散会

特養職員、ヘルパー、デイサービス、ケアワーカーの関係者の方々が集まった。司会者の「相互の活動の意見交換を」との呼び掛けに園谷報告者の発表を中心に制度のあり方について質問が集中。

「情熱も大事だが経済的に安定することも大切」との意見に、制度は必要か不必要かの両論が出された。グループホームの運営は基本線を見だし、利用する老人の幸せを念頭に置きながらすすめるべきとのまとめとなる。「行政には、現場現場で説明すべきであり、強い信念を持って頑張りたい」と園谷さんから励ましの言葉もあった。

★報告者・園谷和夫さん(ことぶき園)より一言

今秋に鳥根県の出雲市で痴呆性老人を考える全国研究集会在り予定されています。ぜひ、ご参加ください!

●第3分散会

主な論点は「職員教育の必要」と「介護保険への不安」。「職員教育の必要」では、まず職員が変わらないといけない。グループホームが利用者にとって天国になるか地獄になるかは職員にかかっている。「介護保険への不安」ではケアプランの恐ろしさや認定の結果が痴呆性高齢者にそぐわない等々話が出た。現場の声を合わせて、行政に対しては発言し、より良い保険にしていこう。

★報告者・藤崎人里さん(きのこエスポール病院)より一言

10月末に笠岡市で行われるクロッカールゴードン・ファンデーションへの推薦をよろしく!

●第4分散会

「被災地におけるケア付き仮設住宅」11人の入所者に対して職員1人というバランスが大切。職員が少ないので、必然的に入所者同士が悪口言いがちでも文え合う下町のような人間関係が作られている。職員は必要な事だけを支援している。支援する側はお年寄りの可能性と実現の芽を摘まぬように…。仮設住宅はいずれ消え行く運命にあるがそこの住まい方は極めてグループホーム

に近いものであり、仮設住宅なき後の地域でも存続されることによりヒューマンラインを構築できる。

★報告者・中村大蔵さん(三反田ケア付き仮設住宅)より一言

徹底的に地域という視点を待とう。草いきれより人いきれのある場所でケアをしよう。

●第5分散会

特別養護老人ホームの方が多く、ケアの限界を感じている事がうかがえる。ホームがお年寄り本人のためではなくその家族のための施設になってしまっているのではないだろうか。お年寄りを一人の人間として見る事が大切。基本的には、もし自分だったらどうして欲しいかを頭に置いてケアを考えれば大丈夫。小規模多機能なグループホームなら実現できる。

★報告者・朝倉義子さん(ヤモリクラブ)より一言

「何もしないプログラム」がグループホームなのではなく「余分なことをしないプログラム」ということが大切。痴呆の人には非日常というサービスが必要であったりする。違いを考えて欲しい。

●第6分散会

痴呆症は「地域で支えられるひとりの人間」という人間理解が必要だ。同時に老人の住む地域を理解し、そこから隔離されたり、プライバシーが見られるようなことがあってはならない。地域の中で安心して生活を送れるように多種多様な職種の方々との連携は必要であり、在宅所やグループホームは地域に根差したものであることが望ましい。

★報告者・林 喜久江さん(はじめのいっば)より一言

地域の人間関係が希薄になっている現在、在宅やグループホームの運営は地域の見直しにも通じ、また住民の声によって支えられるもの。

●第7分散会

お逢者くらぶの発足の動機、実際の活動、今後の課題と方向性について話し合った。詳細は後日報告予定である。さまざまな立場からの情報収集ができ有益な時間を過ごした。

★報告者・五藤万里代さん(お逢者くらぶ)より一言

グループホームの場所探しのアイデアとして生畜や農畜などの活用がだされた。後につなげていけるすごい予感がしている。

●第8分散会

退院後には、公的施設とか老健施設以外で家族的ケアを受けることが良い。それには宅老が今後課題とされる。エンゼルプラン計画がある中で在宅所で子供も受け入れられたらどうか。育児休業を終えた児童を抱える家族も多い。子供と一緒に生活すると老人も生き生きとしてきた例がある。施設の中でグループホームはできないか。公費を受けなくても施設長の考えでできるのではないかと。

ただ制度利用のジレンマを受けないで自由にできる楽しさもある。

★報告者・澤井茂吉さん(癒いの家まごの手)より一言

今はいい人たちがやっているが、いい人達以外にやりたい人も見守っている状況だ。これから都道府県差が出てくる。全国の情報を知るための情報発信基地が欲しいと思う。そういう所を私たちが参加できる場所は参加しながら作っていききたいと思う。

●第9分散会

グループホームのデメリットとしては、閉鎖的で施設長の独断による生活指導等に極くグループホームもでてくる可能性があることだ。そうならないよう、ホームの理念を介護担当者も含めて共有しよう。老人ができないことへの支援、地域に根付いた交流、季節とのふれあいを最大限に活用し、グループホームの目的とされる生活全体のコーディネートを考え、個別的、継続性を持ちながら、老人に対して不利益にならぬよう努めることが必要と思う。

労働条件、集客、総合化、利用者の選択性の確保、地域のトータルなケアの一つとしてのグループホームの位置付けなど後々に運営はできない。

★報告者・宮嶋 渡さん(アザレアンさなだ・大庭の家)より一言

介護保険に対しては、我々が先達として意見集約して訴えていかなければと思う。

●第10分散会

大きくは行政との関わりについて話し合った。あきらめないでアプローチし続けることが重要。民間の活動が評価されれば制度まで変えることあり。良き関係構築への努力を。

二つ目は、介護保険制度の中でのグループホーム、宅老の方向性について。3つのタイプが考えられるだろう。1は法人格をとり介護保険対応とする。2は介護保険と自己負担の併用施設とする。3は自己負担による運営。

いずれにせよ利用者が選択する時代。利用者の視点に立った特徴ある環境と、対応できる施設であれば生き残れる。

★報告者・園本信吉さん(元気な亀さん)より一言

「15年後にまた集ってみれば、きっと(うちのよう)に) 独自路線を走った所が生き残っているよ」(との成勢のよい発言に会場は爆笑)

●第11分散会

グループホームをするには、どういう資格が必要かとの質疑応答。特養、宅老、それぞれに良さがあるのだからそこを生かしていけば良い。特養の良さはハードの充実とスタッフの多さ。たとえば、月曜から金曜までのデイを宅老で、土、日を特養やデイサービスで。

グループホームを施設の中で作っても所詮施設なので宅老所にかかわらないとの声も出た。

★報告者・田部井康夫さん(デイセンターみさと)より一言

ターミナルを課題と考えない宅老はいらない。グループホームは中程度の痴呆までと区切るようなやり方は差別の思想に結び付く。

●第12分散会

グループホームは自然発生的に家族の要望があったから始まったものである。だから行事も日課もない。特養等との違いはこれらにあると思う。小人数の利用者だから思い思いの事に対応できる。そして、地域の中に関わって、いける。地域の中に痴呆の人間がいる。それが普通であることの認知が大切。施設の地域への開放も重要な事柄だ。

また、職員研修や質の向上に向けての努力も重要である。

★報告者・奥山久美子さん(のぞみホーム)より一言

グループホームは規模の大小の問題ではない。中身の問題だろう。

●第13分散会

大きな施設でのケアに疑問を感じる。その人らしい生活ができるような方法はないかと現場の生の声が出た。「自分だったらどのようにしたいか」ということにケアの原点はある。大きい所にも小さな所にも役割はそれぞれある。貧困救済の福祉から個人尊重の福祉へと変遷の今、私たちにできることは何か。誰がやってはできない、やってみることだ。いろいろな立場の福祉人が動き出した。

★報告者・高木敏江さん(デイ・ホームあいあい)より一言

施設ではどうしてもプログラム実施の評価が監査される。行政の方はあまりチェックしないでください。それにしても行きたいところが増えましたから10年後に安心して受けられます。

●第14分散会

グループホームを基礎として多様化した活動の実現に向かって話が盛り上がった。いずれにせよ、良い介護は良い人材を得るために身分保障の確保と確立の上にあるのではないかと。安易な形でのボランティアに頼っていてはどんな立派なケアの計画も成り立たない。オンブズマンも必要であり、行政の仕事ぶりや計画をチェックし、実践の後からついてくる市町村のセクションにも意識づけながらすすめていこう。諸施設を使い分けることを利用者の人達に知らせていくべきではないか。

■分散会報告

なにしろ第一回目の集まりとして、ざっくりといろいろと出してみることが大事なのではないかという思いで企画したこのフォーラム。その趣旨は分散会を経て見事に実った。

分散会のあとの「報告ディスカッション・グループホームの課題と展望」では分散会の報告とまとめを行ったが、ほぼ500名が最後まで残るという、全国大会では珍しい高参加率となった。

最後に、みやぎ宅老連絡会主任研究員の高橋誠一さんがまとめた。

「分散会でも財政、運営、地域、施設におけるグループホーム的ケア、介護者とのかかわり、介護保険下での運営等と多岐に渡った問題点が出されました。さらに今回のフォーラムの特徴は、宅老やグループホームは20あれば20通りのやりかたがあることを確認できたことです。宅老の場合は特に地域の中で生まれてきたものということが、とてもはっきりとしている。そのため、それぞれ(の宅老・グループホーム)が、ひとつひとつの芸術作品のようなものです。表現する言葉も各々違い、また解釈するのがとても難しいものなのです。これからのよい相互交流の場が必要になると思います。理解し合うには互いの場に身を置くことが大切であり、年に一回くらいこうやって集まるのが良いと思います。最終的には自分で自分の絵を描くこと。このフォーラムの場が一つの運動やエネルギーになって行けば良いのかなと思います」。

★報告者・平木千紗子さん(宅老所ひばり)より一言

富山では、痴呆、精神、身体、知的障害者と一緒にケアできるデイがある。いつまでもボランティアでなく介護労働者としてやっていきたい。

●第15分散会

主だった意見としては「お金もさることながら、ハートで行きましょう。」「家族に対するケアができる所には年寄りも安心して頼める。」などがあった。特養併設のグループホームでは、「特養との関係はうまくいっているのか」という質問もあり、さまざまな立場から話題に富んだ分散会となった。

★報告者・斎藤ヨシ子さん(さわやかデイホーム悠々)より

この会場の皆さんの熱き思いをネットワークしたい。全国的なネットワークづくりについて皆さんで話をして欲しい。

●第16分散会

特養ホームで働き疑問を感じる職員。また、このままではいけないと動き出している施設責任者などが参加。働きながら、自分の顔を見ることが出来るのか。ポツンと一軒のグループホームがあっても何にもならない。ポストの数ほどグループホームが必要だ。これからは善良な人が楽しくやっていたら良いといっているだけでなく、仕事として成り立つ方法が必要だ。働く人の生活を守る社会全体のシステム作りがなければならぬ。

★報告者・武田和典さん(シオンの園・妙見庵)より一言

グループホームは目的ではなく手段の一つである。集団援助、集団生活である点は既存の施設と変わらない。ただ、より小さな集団の持つきめこまやかなフレキシビリティのある援助形態である。そして住み慣れた生活環境が提供できる点がメリットである。また、いい人だけでは広がらない。良くても悪くても必要な人に必要なサービスが提供できるシステムとして構築しなければならぬ。

and、議論ではなく目の前の現実(実体)が必要!

●第17分散会

会の盛況ぶりにすごいものを感じた。数年前には通じなかったグループホームという言葉だが、今は行政も聞く耳を持ち、一緒にやろうとする状況になっている。思いを実践に移す、動き出せばどうかなる、やりたい時が始める時である。

地域と一緒に行動し心をかたむけて行政に報告することが大切。支援はいろいろある。基本が小さな宅老であることが実感できた。事業の中で毎日の希望、泊まりの希望等をかなえる中でデイから宅老へと多様な対応が必要となる。その責任においてボランティアから専任職員への責任対応が必要となる。

★報告者・築茂三郎さん(まりやの家)より一言

宮城県知事さんがいいね。うちやまいいとの声がありました。

●第18分散会

小規模な個性に合わせたケア、地域作り、柔軟な対応などグループホームケアの可能性はさまざまなものがある。お年寄りに本当に合ったケアをしたいということを中心に、共通の極みとしては、立ち上げるまでと介護保険導入された後の運営をどのようにしていくかという点がだされた。本日の取組をもとに今後、各地での取り組み、ネットワーク作りが期待される。

★報告者・遠田隆子さん(にもれびの家)より一言

医療関係者とのネットワークの必要性や地域との関わり大切さを感じる。痴呆の方の場合、何ができないのか、できるのかをしっかりと知ってケアすることが大切。

●第19分散会

新たにグループホームを始めたい方が仙台と秋田におり、ディスカッションは「立ち上げ」をテーマに話し合った。場所、スタッフ、PR、資金など具体的に先輩グループから立ち上げ状況が説明された。きっと秋田にグループホームが一つ増える。

「あべさん家」の阿部代表から「ひとりひとりお年寄りを大事にしたケアのグループホームを地域の中で立ち上げていこう」とのまとめがあり、予定時間をオーバーする熱気のある分科会であった。

★報告者・安部昭典さん(宅老所あべさん家)より一言

昨晩のスライフのBGMはさだまさしの「奇跡」という歌です。奇跡を作っていきましょう!

●第20分散会

特養におけるグループホーム的ケアの課題が出され、現在の条件の中で目配り、気配りによってたくさん改善できる点がある。大きい施設でも小さい施設でもお年寄りのために、よりきめ細かいケアができるのではないかと意見が多く出された。澤向さんからは痴呆性老人は言葉に飢えている。施設の大小を問わず、話し相手になれる環境づくりが必要との話があった。

★報告者・澤向裕子さん(ナンシティバ戸「輪の家」ザ・セカンド)より一言

有限会社でやっていけるかという質問が出たが、寄付行為が来ないこと、スタッフの介護福祉士の受験資格が取れないことがデメリットとなる。これからは笑顔を忘れずに頑張ってください!

■フォーラム終了後に...

無事に二日間のフォーラムが終了。

その熱気がまだ漂っている松島で、パネラーや実践報告者の方々&事務局が会し、今後の方向性を含めた話し合いがもたれました。そして、第2回も宮城で実施する方向になりそうです。

詳しいことが決まりましたら、またお知らせをさせていただきます。お楽しみに!

また、この記念すべき第1回全国フォーラムのすべての内容は、「報告!小さいことはいいことだ(仮題)」で、詳しく詳しく、分析も交えてまとめる予定です。発行は6月を予定しています。

これもお楽しみに!予約受付中です。お問い合わせは、問件書房まで 03-3993-5545

最後に、速報といひながら、第4弾の発行がこんなに遅れてしまったことをお詫びします。